

女子大学の教員養成における SDGs に対する認識と講義による変容

○田爪宏二 (京都教育大学)

高垣マユミ (津田塾大学)

キーワード：持続可能な開発目標 (SDGs)，教員養成

「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ＝SDGs」は、日本においても社会的な関心事項であり、我が国においても啓蒙され、科学・環境領域などを対象とした取り組みが進められてきている (長岡, 2018; 浅利, 2019 など)。しかし、これらの領域以外を専門とする女子大学の教員養成においても同様に、将来持続可能な社会の担い手となる子どもたちに SDGs に関する適切な意識や知識を育てることが求められ、そのような力を持った教師を養成する必要性は高いと考えられる。そこで本研究では、科学・環境領域以外の学科の女子大学の教員養成において SDGs の講義を行い、講義の前後で、SDGs に関する認識がいかに変容するかを検討することを目的とする。

方 法

調査方法・対象 4 年制の私立女子大学において教職科目を受講する学生に SDGs に関する 90 分の講義を 8 回行った。その前後に質問紙を実施し、両方への回答が得られた 33 名を分析対象とした。**質問項目** 質問紙において、SDGs の 17 の目標について説明した。各目標について 3 つの設問：(1) 関心度 (興味があるか)、(2) 認知度 (知っているか)、(3) 取組みのイメージ (日本では取組みがなされていると思うか) を設け、それぞれ 5 件法で質問し、得点化した。

結果と考察

因子分析 3 つの設問及び講義の前後のデータを総合して因子分析 (主因子法、プロマックス回転解

法) を行い、4 因子を得た。各因子に対して因子負荷量 .4 以上の項目を因子項目とした (Table 1)。因子項目の得点の平均値を尺度得点とした。

項目間及び講義前後の比較 (Figure 1) 尺度得点を従属変数として、設問ごとに因子 (4) × 調査時期 (2: 講義前/後) の参加者内 2 要因分散分析を行った。いずれの設問においても両要因の主効果が有意であり、調査時期については、講義後は講義前よりも得点が高かった。調査時期の主効果については、(1) 関心度では「平等・公正」 > 「福祉・教育」 > 「自然環境」 > 「産業・経済」の順で得点が高かった。(2) 認知度では交互作用が有意であり、講義前は「平等・公正」 > 「自然環境」 > 「産業・経済」、及び「福祉・教育」 > 「産業・経済」の順で得点が高かった。講義後においては「平等・公正」 > 「自然環境」 > 「産業・経済」の順で得点が高かった。(3) 取組みのイメージでは「福祉・教育」 > 「平等・公正」 > 「自然環境」の順で得点が高かった。

まとめ 因子のまとまりの傾向から、科学・環境領域以外の学科の女子大生の SDGs に対するイメージは、教育やその対象である子どもに関する問題、身近な生活に関する問題、さらに自然や地球といった問題によって区分されていることが窺われる。また、「平等・公正」についての関心度及び認知度が高く、「福祉・教育」についての取組みのイメージが強いといえる。さらに、講義においては「SDGs の全般的な内容と日本企業の先進的な取り組み」を説明したが、講義後は、SDGs に対するイメージは向上し、ジェンダー平等や世界の貧困などに関心の高い女子大生が、視野を広げ、「自然環境」に関する認知度が大きく上昇したことが明らかにされた。

Table 1 SDGs のイメージについての因子項目

因子 I. 平等・公正: 差別の撤廃, 平等・公正な社会の実現 ($\alpha=.874$)	
10 人や国の不平等をなくそう/5 ジェンダー平等を実現しよう/1 貧困をなくそう/16 平和と公正をすべての人に	
因子 II. 自然環境: 自然や地球環境の保全 ($\alpha=.878$)	
14 海の豊かさを守ろう/15 陸の豊かさを守ろう/13 気候変動に具体的な対策を	
因子 III. 福祉・教育: 福祉や教育の向上 ($\alpha=.857$)	
2 飢餓をゼロに/3 すべての人に保健と福祉を/6 安全な水とトイレを世界中に/4 質の高い教育をみんなに	
因子 IV. 産業・経済: 産業や経済活動 ($\alpha=.876$)	
9 産業と技術革新の基盤をつくろう/8 働きがいも経済成長も/17 パートナリシップで目標を達成しよう/11 住み続けられるまちづくりを/12 つくる責任/7 エネルギーをみんなに、そしてクリーンに	

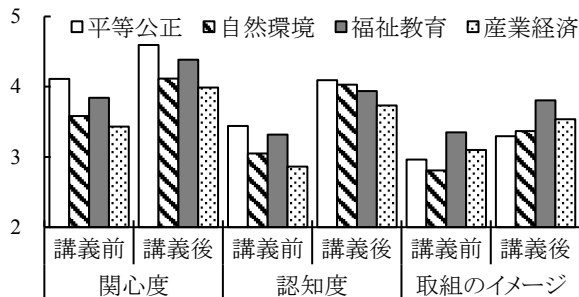


Figure 1 各設問、因子、講義前後ごとの得点の差異